

## 視覚障害の認定基準に関するこれまでの論点整理

## 1. おおむね方向性が確認できている事項

## &lt;視力障害&gt;

- ・ 現行の視力障害は、両眼の視力の和で認定されることとなっているが、良い方の眼の視力をベースに判定することとしてはどうか。

## &lt;視野障害&gt;

- ・ 現行は、ゴールドマン型視野計による認定基準しかないが、自動視野計による認定基準を新たに設けてはどうか。
- ・ 現行では、周辺の視野狭窄が進み中心部の視野も欠損した場合や、周辺視野に異常がなくとも中心視野が重度の障害を呈している場合については、視野を評価する方法が明確にされていないが、これらの場合についても更なる視野判定に進められるように、新たに基準を設けてはどうか。

## 2. 検討事項

## (1) 視力障害について

## &lt;これまでの議論&gt;

- ・ 第1回検討会に提出された、眼科学会・眼科医会の合同委員会による改定案は、0.1以下の視力についてより細かく数値的な取り扱いを行うために、「logMAR値」の0.6～1.7の範囲を、0.6, 0.7, ...1.6, 1.7と計12段階に細分化し、3段階ずつ2～5級の各障害等級に割り当て、その結果を、日常診療で用いられている小数視力に換算することで、客観性・公平性を期したものとなっている。(参考資料2、32/37)
- ・ この案によると、良い方の視力が0.04かつ他方の視力が0の場合、現行2級であるが、改定後に認定を受けると3級となる。また、良い方の視力が0.08かつ他方の視力が0の場合、現行3級であるが、改定後に認定を受けると4級となる。

- ・一方、第3回検討会に提出された、日本盲人会連合による改定案（参考資料3）は、良い方の視力が0.04かつ他方の視力が0の場合に2級とする、また良い方の視力が0.08かつ他方の視力が0の場合に3級とする現行基準が妥当であるという前提で、良い方の眼の視力をベースに見直したものとなっている。
- ・この案によると、改定後に障害等級が下がる視力区分がない。
- ・米国の American Medical Association(AMA)の推奨する評価法である Functional Vision Score(以下、「FVS」という。)は、視力と視野を統合してスコア化するものであるが、諸外国において、QOLとの関連性を示すデータがあり、米国・カナダ・オーストラリアなどで用いられている。
- ・眼科学会・眼科医会の合同委員会においても、FVSに準拠する形で日本の障害者の認定を行う可能性も含めて検討されたが、大幅な改正となること等から「とりあえず、変更できるところは変更し、理想の形を次に導入する二段構えで行けたらどうか」という検討結果となっている。(参考資料2、6/37)
- ・関係団体ヒアリングでも、「国際基準に準拠した認定基準を確立すべき」という要望があった。(参考資料4)

## <論点>

- ・視力障害の認定基準の見直しを行うために、必要な基礎データを蓄積する必要があるのではないか。
  - ・その際、視力と視野と統合してスコア化し、諸外国においてQOLとの関連が示されている、FVSの導入も選択肢に含めた検討を行うこととしてはどうか。
  - ・そのために、数年単位での調査研究を行うこととしてはどうか。
  - ・今回は、データ蓄積等による本格見直しの前段、すなわち当面の見直しとして、以下の①②の考え方に基づき、最小限の見直しを行うことが考えられるか。
- ①視力障害の各等級の境界値については、客観性・公平性を期した合同委員会の案を基本としてはどうか。
  - ②①の例外として、良い方の視力が0.04かつ他方の視力が0の場合と、良い方の視力が0.08かつ他方の視力が0の場合については、日常生活の困難度という観点から等級を下げるべき強い根拠が現時点であるわけではないことを踏まえ、経過的处理として、新規認定分も含め現行の等級を維持することとしてはどうか。

- (2) 片眼失明者や、その他視力・視野以外の理由で見づらさを来たしている者について、手帳制度での対応および手帳制度以外での対応をどうするか。

<論点>

- ・ 身体障害の認定対象を拡大するには、客観的・合理的な根拠（日常生活の困難度が、障害認定が必要な程度以上であり、なおかつその障害が永続するというを示す根拠）が必要であるが、現状では十分あるとはいえないのではないか。
- ・ (1)の調査研究を通じて、さらにデータの蓄積を行うこととしてはどうか。
- ・ このほか、手帳制度以外での対応について(1)の調査研究と並行して、日常生活の困難などを踏まえた支援策を引き続き検討してはどうか。

(参考) FVS について

- ・ FVS は、2002 年の国際眼科学会で国際標準として採択され、その後 AMA の身体障害者基準に掲載されている。
- ・ FVS は、視力から得られる機能的視力スコア(FAS)と、視野の状態から得られる機能的視野スコア(FFS)の積算によって得られるスコアである。  
$$FVS = FAS \times FFS / 100$$
- ・ このうち、視力から得られる「機能的視力スコア(FAS)」は、両眼の視力スコア(VAS)、右眼の視力スコア(VAS)、左眼の視力スコア(VAS)から求められるスコアであり、両眼の VAS に 6 割、右眼の VAS に 2 割、左眼の VAS に 2 割のウェイトが与えられている。  
$$FAS = \text{両眼の VAS} \times 0.6 + \text{右眼の VAS} \times 0.2 + \text{左眼の VAS} \times 0.2$$
- ・ 各視力スコア(VAS)は、logMAR 値によって求められる数値  
( $VAS = 100 + 50 \times \log \text{MAR 値}$ ) であり、例えば小数視力が 0.01 以下の場合  $VAS=0$ 、小数視力が 1.0 の場合  $VAS=100$  と、視力が良いほど視力スコア(VAS)の値も高くなる。
- ・ 一方、視野の状態から得られる「機能的視野スコア(FFS)」は、両眼の視野スコア(VFS)、右眼の視野スコア(VFS)、左眼の視野スコア(VFS)から求められるスコアであり、両眼の VFS に 6 割、右眼の VFS に 2 割、左眼の VFS に 2 割のウェイトが与えられている。  
$$FFS = \text{両眼の VFS} \times 0.6 + \text{右眼の VFS} \times 0.2 + \text{左眼の VFS} \times 0.2$$
- ・ 各視野スコア(VFS)についても、例えば正常視野で  $VFS=100$  前後、視野がない場合  $VFS=0$  と、視野の状態が良いほど視野スコア(VFS)の値も高くなる。
- ・ このように、視力・視野を統合して求められた FVS には、QOL と関連があることを示す文献がある。